

2025 年 11 月 13 日木曜日、高くなった空、色鮮やかな木々たち、降り注ぐ秋の光。恒例の立科小学校全校マラソン大会が行われました。準備運動を終えてスタートラインについた 1・2 年生の子どもたち。ハアハアと息をしながら、二年生の Y 君が担任の先生に向かって「**からだを動かしていたら、心もあたたかくなってきたよ**」と声をかけてくれていました。あたたかな気持ちが伝わります。そんなあたたかさに包まれながら、一斉に走り出していく子どもたち。



霜の朝——
凍えるように輝く枯草の白
見わたすモミジは、燃えるような赤
のぼる朝陽の中を、走り始める子どもたち
からだ全体に向かってくる風のやさしさ
蹴る足、軽く
タン、タン、タンとリズムを刻む
舞い落ちる枯葉を、蹴飛ばしていくよう
まぶしく広がる、立科の青い 青い空
淡い光が行きかう
燃えるようにそびえたつ、浅間の峰、峰、峰
燃える、燃える 浅間が燃える

顔をゆがめた A さん
抜き去っていく G 君を見やりながら、
聞こえてきた、ハアッ ハアッの息遣い
次の瞬間 キッと視線を前に向けた A さん
両手を広げ、腕を力強く振り上げ、
風を感じながら、走り出していく



下を向いていた B 君
沿道の応援の声が聞こえた瞬間、深く息を吸う
そしてスピードをあげていく
足がふわりと宙を舞う
小さな体が、大きく躍動する
すごいよ、B 君！
身体が浮いているよ！

走る、走る子どもたち
走る、走る風の子たち
前へ、前へと歩を伸ばす

続く秋の道、風の道
「身体を動かすと、心があたたかくなってきた」
そんな言葉をつぶやいた Y 君が、駆けていく
自分が動き出すことで
心が動き出す
自分が動き出すことで
はじまっていく、からだと心のおしゃべり
みんな、みんな
どんなおしゃべりをしたのかな

指導主事だより
なんだか うれしい
マラソン大会から

教育委員会

相談時間等
●立科小学校/午前 9 時～午前 11 時 30 分
電話 0267-56-3131 (呼)
●立科中学校/午後 2 時～午後 5 時
電話 0267-56-1076 (呼)
●立科町児童館/
午前 11 時 50 分～午後 1 時 40 分
電話 0267-56-0248 (呼)
(担当 指導主事 中島一彦)



学校行事のマラソン大会を終えた後、六年生大場李花さんが書き綴った文章です。

今日、小学校生活で最後のマラソン大会が終わりました。私はいつも最下位か、後ろから 2、3 番目で、6 回の練習を入れて、12 回ほど、毎回後ろからみんなを眺めていました。

今回も最下位でした。でも目標は高く設定していませんでした。シヨックはありません。

所々に居る先生たちに申し訳ない気持ちもありましたが、その前だけは少し走って、できるだけ速く通り過ぎるようにしました。1 年から 5 年の時の自分は、マラソン大会は嫌なものかと思っていなかったけど、なぜか今年は逆に「最下位は悪いことじゃないな」と思って全然大丈夫だったけど、それは別の色々があって、正直いつも通りでした。

去年は順位が高い人にペースを合わせてみたけれど、結局最後で、でも今年は吹っ切れて、最下位の特権という応援をもらいながらゴール出来ました。

体調が悪くて断念しそうだったけど、それは違うと思い、諦めませんでした。もちろん上位の人や他の人には到底及ばないけど、これでも自分なりに頑張ることができたからよかったです。

いつも通りの走り、順位で、何も変わらなかったけど。走ったり、運動することが苦手でも、当たり前のことだけど、完走できて、休んだりもせず、できたことが、私にとって一番大事なことだと思います。もうマラソンをする機会はないと思うけど、他のことにも自分の中の最高の力で取り組みたいと、思えてよかったです。

(立科小 六年 大場李花)

12 歳の少女が比較や競争への違和感から、その違和感と対話し続けているのです。語りかけてくる違和感に押しつぶされるような苦悩も時に抱えながら、**自分の心と対話し、自分を変えていく**。「最下位の位置から眺め」つつ、自分の在り様を考え続けている李花さん。

「先生たちには申し訳ない思い」「そこだけはできるだけ走ろうとする」そんな他者への気遣いに、李花さんの誠実さがあふれ出ます。

生活から生じる子どもたちの喜怒哀楽。喜びや痛みを抱きかかえるように懸命に生きている姿も浮かび上がるのです。李花さんの文章にふれ、ミヒヤエル・エンデ作・大島かおり訳「モモ」のふたつの文章を思い出しています。

○「時間とは生きるということそのもの」
○「人のいのちはここを住みかとしている」

エンデの言う「生きることは時間の流れ」は「一瞬、一瞬をかけがえのないもの」として生きること。

「いのちはここを住みかとしている」は、混沌とした自分の心と対話する場所。あるいは、今、目の前にある自分自身の感情の動きを感じる場所。

李花さんは走りながら湧きあがる自身の感情を少しずつ整理していきます。悔しさ、成果がなかなか見えてこない戸惑い、不安、未来の自分等それら混沌とした思い・・・そうした様々を『ああ、自分はこう見ていたのか』と自己認識しつつ、文章を書き上げた李花さん。心と言う住みかを持つためには、一瞬一瞬を抱きかかえるように生きなければならないということを李花さんが教えてくれるのです

どんな小さな子どもでも、いや小さな子どもであるからこそ、いっそう生活者としての姿勢が確かであり、その感受性も鋭いのだという指摘を、李花さんがマラソン大会という学校行事を通して指し示してくれているのです。子どもたちこそ深く生きているという思いを強くします。

李花さんが「他のことにも自分の中の最高を～」と文末に記した生き方に思わず涙腺が緩みます。そう自分の今の命を起点に、これから人生を自分らしく生きようとしている 12 歳の少女のけなげな決意。